

近代日中関係史研究の新しい視点 ——黄自進『蒋介石與日本』を中心に

高 文勝

はじめに

近代日中関係史を読み解くには、蒋介石（1887-1975）への理解を避けては通れない。なぜなら、近代中国に、蒋介石ほど日本に深い関わりを持った政治家はいないからである。

蒋介石は1906年、19歳で日本に留学し、日本の軍学校で3年、士官候補生として高田連隊で1年実習するなど青年期の4年を日本で過ごして、その後も数回訪日している（最後の訪日は1927年9月）。このような日本体験と日本への特別な思いは、彼の人生と彼の抱く日中関係のビジョンに大きな影響を与えた。

孫文の後継者として中華民国の統一を成し遂げた蒋介石は、国民政府と中国国民党の最高指導者として、長らく中国の内政と外交に君臨してきた。その彼は日中関係についてどのような将来像を持ち、どのような対日外交策をとり、今日の日中関係に如何なる示唆を与え、教訓をもたらしたのかを明らかにすることは極めて重要な課題である。

しかし、蒋介石と日本との関係に対する評価は難しい。彼の対日感情が多面的であるため、蒋介石研究だけでなく、国民党史や中国政治史の研究も深く関係しているからである。ゆえに、その評価は政治的立場によって極端になりやすいし、時代の変化にも大きく左右されている。

近年は、中国大陆と台湾の政治状況の変化、兩岸関係の進展、新たな史料公開（とりわけ、2006年の米国スタンフォード大学フーヴァー研究所所蔵「蒋介石日記」の公開）に伴って、より詳細な検討が可能となり、政治的立場を離れた実証的研究も着実に進んでいる。その代表的研究者が黄自進氏である。

黄氏は現在、台湾の中央研究院近代史研究所研究員であり、近代日中関係史と近代日本政治思想史の専門家である。氏は日本留学の経験（慶応義塾大学法学研究科にて法学博士号を取得）を持つ知日派で、日中の友好と相互理解を熱心に推進している。日本留学中には、吉野作造の中国観を研究したことがある。近年、蒋介石と日中関係とのつながりに重点を置き、関係著書と論考を数多く

刊行し、台湾国史館所蔵の蒋介石日記を利用して『蔣中正總統五記』も編集している。その中で特筆すべきは、黄氏の日本語著書『蒋介石と日本一友と敵のはざま』（武田ランダムハウスジャパン、2011年）であり、スタンフォード大学の「蒋介石日記」等の史料を基礎に、蔣の視点を軸に近代日中関係史を構築している。

これらの研究成果を踏まえてさらに高い学術レベルに達したのが、黄氏の中国語著書『蒋介石與日本：一部近代中日關係史的縮影』（蒋介石と日本：近代日中関係史の縮図）（台北：中央研究院近代史研究所、2012年）である。本書は、日本留学から第二次世界大戦後に至るまで、蔣の軍事的、政治的経歴を詳細に分析し、日本に対する敵・味方意識の変化、中華民国と日本の外交関係を検証したものである。従来の説と異なる蒋介石像を提示し、日中関係史に新たに貢献したため、台湾では2013年度（第48回）中山學術文化基金会の人文・社会科学分野の學術著作賞と、2014年度（第3回）中央研究院の人文・社会科学分野の學術専門書賞を受賞している。

以下、本書の内容を概観し、その意義を略述してから、私見を若干提起したい。

1. 概要

本書は6章で構成され、序章と結論が付されている。序章では、まず蒋介石に関する先行研究と問題点を紹介する。第一章「人格形成と日本一学習、認知、拠り所」では、蔣の日本体験を、留学期・青年期・壮年期に分けて論じる。日本留学が蔣の革命参加のきっかけとなったこと、日本の近代思想に啓発を受け、孫文の日本支援者の人脈を受け継いで日本を再起のための基地としたこと、日本人が孫文以上に自分を高く評価したことに自信を強めたこと、などについて論述する。そして、日本での軍隊体験と長期にわたる日本観察の結果、S・スマイルズの格言「天は自ら助くる者を助く」を信奉した蔣が、中国は日本を近代化の手本として学ぶべきだという信念を生涯にわたって中国人に訴え続けたことを詳述する。

第二章「北伐期における友から敵への変化」は、北伐戦争（1926-28）による中国統一の過程で、蒋介石にとって中国共産党と日本政府が最大の敵となったことに言及する。蒋介石が1927年4月に上海で反共クーデターを起こしたのは日本政府の勧告を受け入れたことによる。日本の対中策には地域優先順位（第一は満蒙地域、第二は華北地域、第三は華中地域）があり、日本の支援には、

蔣の勢力を華南・華中地方に封じ込める狙いがあり、三度にわたる山東出兵もそのためだった、と著者は見る。1928年5月の済南事件が日中関係の転換点となり、イギリスを主敵としていた中国のナショナリズムは反日に向けられ、蔣も日本に警戒心を抱き、対日関係が友好から敵対へと変化したと分析する。

第三章「九一八事変と『不抵抗政策』」は、「不抵抗政策」の由来と満州事変後の蔣介石の対応を論じる。蔣介石は、緊迫した状況下で、関東軍と国民政府との対立を回避することは不可能だが、日本政府も軍部も中国と戦争するつもりはないし、日中衝突は避けられると判断して、緊張緩和のために二つの方策を講じた。一つは、反共政策をとり、日本と軍事協力を結び、陸軍中央との関係改善を図ろうとした。もう一つは、関東軍の挑発に「不抵抗政策」をとった。この「不抵抗政策」に対して、東北の張学良も異議はなかった、と分析している。

黄氏によれば、蔣介石が「不抵抗政策」をとったもう一つの理由は、国民政府が近代国家としての体制を整えていなかったからであった。満州事変直前の中国では、南京と広州に二つの国民政府が存在し、南京政府の内部には満州の張学良の勢力が、外部には共産党や各自の地域を持つ軍閥があり、諸政治集団の間では満州事変に対する認識も対応も一致していなかった。そのため、蔣は「不抵抗政策」をもって日本との全面対決を避け、時間を稼ごうとしたわけで、「絶交せず、宣戦せず、講和せず、締約せず」という蔣の4原則は、絶対的な無抵抗と領土放棄を意味したものではないと指摘する。

第四章「華北危機と『安内攘外』」では、満州事変後の国民政府の「安内攘外」政策に焦点を当てる。これはすなわち「西南地方の経営」と「日ソ開戦」である。前者は、国民政府の権力が及ばない西南地方を掌握して抗日戦争の後方基地としたことであり、後者は、日本が米・ソとの摩擦を解決しないまま中国に大軍を派遣することは不可能なため、中国と本格的な戦争を行う前に、日ソ戦争が勃発するだろうと期待されたことである。蔣は「敵の敵は味方」と思い、「反共」を掲げ、軍事行動以外の手段で日本軍の挑発に対応し、華北地方での主権を図ろうとした。この「安内攘外」政策によって、共産党への打撃、中央政府の勢力拡大、対日戦争の回避という「一石三鳥」の効果が得られた、と著者は論じる。

第五章「全面戦争への対応」では、日本軍の戦略を「軍事決戦期」「政治主導期」「辺境封鎖期」「太平洋戦争期」の4期に分けて説明し、蔣介石の対応を、政略的・戦略的と、軍事的という側面から分析する。政略的・戦略的対応

については、日ソ摩擦と日本の反共・恐共心理を利用し、中ソ関係、国共関係、日中関係、汪兆銘政権との関係が絡み合う複雑性をうまく操り、日本軍に戦略の見直しと不断の調整を迫り、中国の抗日戦争に有利な状況を作り出した、と論じる。一方、軍事的対応とは、「上海出撃」に続いて「華中保衛」（武漢護衛）、「以緩応急」（緩をもって急に應じる）、「苦戦待変」（苦戦をもって変化を待つ）などの諸策であった。黄氏は、日中戦争において中国は軍事的に日本に戦勝したわけではないが、勝利へ導いた要因の一つは蒋介石の正しい戦略だったと説明する。

第六章「戦後配置と『以德報怨』」では、「徳を以て怨みに報いる」という蒋介石の戦後対日政策の内実とその時代背景を論じる。その政策は彼の対日態度を反映し、最初は具体策ではなかったが、のちに日本への寛大政策の代名詞となっている。この政策の主な内容は、天皇制維持への支持、日本分割統治への反対、中国在留日本人の早期帰国の実現、対日賠償請求権の放棄である。賠償放棄は蒋介石の本意ではなかったが、戦後日本の早期復興に大きな役割を果たし、東アジアの国際政治にも大きな影響を及ぼしたと論じる。つまり、蒋介石が日本と反共統一戦線を築き、日本の復興を促進し、米国の対ソ封じ込め策を成功させ、日本の持つ「反共要塞」の役割を可能にしたからこそ、台湾に撤退した後も、態勢を整えて中共との対峙を継続できたと論じる。つまり、「以德報怨」は、日中和解に寄与するとともに、最大敵の中国共産党やソ連に対抗するための政策であったという。

2. 本書の意義

本書の最大の特徴は、「蒋介石日記」に依拠するとともに、日本の関係史料を多く利用し、蒋介石の考えを深く分析したことである。特に次の五つがオリジナルな論点として挙げられる。

一つ目は、蒋介石像の複雑性と、親日派ゆえに抱えたジレンマに関すること。中国は日本に学ぶべきと主張した蔣は、日中戦争期でも日本の武士道精神を高く評価し続けるなど、文化的にはアジア主義者だったと著者は見ている。しかし、日本の「裏切り」は、知日派・親日派のジレンマと悲哀を物語ると指摘する。

二つ目は、全書を貫く重要な鍵観念である反共に関すること。済南事件後、日本を敵に回したが、対日・対共の同時戦争を避けるために、反共を掲げて日

本と協力を図り、日中戦争の過程でも反共を旗印に日本との関係を維持した。対日戦後処理も反共・反ソという立場からのものだったと指摘している。

三つ目は、最も議論を呼ぶ蒋介石の「不抵抗政策」と「安内攘外」に関する解釈である。いずれも近代国家体制の不備を背景に、共産党の殲滅、中央政府の勢力拡大、対日衝突の回避を企図したことだという。

四つ目は、満州事変後、東北地方の速やかな回復は関東軍の綿密な計画だけではなく、関東軍に協力した中国人が数多くいたことに関係するという指摘である。東北地方の政界と実業界の多くの有力者が旧張作霖政権を支え、関東軍の「新国家建設計画」に加わり、「満州国建国」の礎の一部をなしていたと分析する。

五つ目は、従来の説と違い、対日賠償請求権の放棄は蒋介石の「以德報怨」政策の一部に過ぎず、その政策の主な内容は天皇制の維持、日本分割の阻止、日本人の早期帰還にあったと論じた点である。

3. 若干の疑問

本書には説得力の弱い部分もあるが、著書全体の価値を損なうものではないことは言うまでもない。ここで私見を述べさせていただく。

第一に、著者は蒋介石を先見の明のある政治家として、その対日戦略を高く評価している。だが、「敵の敵は味方」という方針の下での「西南地方の経営」と中央勢力の拡大、戦後の「対日政策」は戦術的には成功したかもしれないが、戦略的に成功したとは言えないだろう。満州事変を予見できなかったことや、過大に期待した日ソ戦争が勃発しなかったことなどが示すように、蒋介石の国際情勢の判断に常に偏ったものがあることは否めない。

第二に、蒋介石の対日政策が日本の対中政策にどのような影響を与え、日本が蒋介石の対日の意図をどの程度まで把握していたかについてはいまだ分析されていない。

第三に、著者は蒋介石の日中友好論や日中提携論を高く評価するが、その本質は、日中両国民に向けられたというよりも、中国共産党とソビエトに敵対して政権維持を図るためであり、日中友好・和解にならないばかりか、皮肉にも政権自体が日本に見捨てられる結末を招いたのである。為政者は、政権維持を国益と両立させるべきだが、蒋介石は反共による政権維持を最優先し、反共が

日本の国益にもなると確信した。一方、日本は反共よりも日本の国益を優先するのが常であった。蔣の対日関係において悲劇を免れなかった原因の一つはここにあるのではないかと思う。

第四に、著者は「敵か、友か」と題する蔣介石の文章を引用し、満洲事変について、中国側にも責任がある、すなわち、国民政府による「革命外交」は関東軍を刺激し、満洲事変を誘発したという見解を示している。これは『昭和の動乱』¹と『重光葵外交回想録』²における重光葵の主張と同じである。事変後の事態推移を見る限り、たとえ日本側の主張する東北地方の商租権が解決されても、満洲事変ひいては日中戦争が本当に回避できるものであったかは非常に疑問である。

おわりに

2006年以來、スタンフォード大学の「蔣介石日記」を活用した研究は主流となっている。日本でもそうした研究成果が続々と発表されている。例えば、家近亮子『蔣介石の外交戦略と日中戦争』（岩波書店、2012年）では、蔣日記を参照しながら、日中戦争期における蔣介石の外交指導を評価し、蔣介石解釈を困難にする複雑な要因を「多面体のプリズム」と表現している。山田辰雄・松重充浩編著『蔣介石研究—政治・戦争・日本』（東方書店、2013年）では、蔣介石と日中関係を実証して、新説を試みている。他に、野嶋剛『ラスト・バタリオン—蔣介石と日本軍人たち』（講談社、2014年）は、戦後台湾の政治に大きな役割を果たした「白団」の人物群を通して、蔣介石の対日観に関する理解を深めている。上記の諸書は、近代日中関係史の研究に新しい観点を提供し、今日の日中関係にも示唆を与えているが、ここでは詳述しない。

蔣介石研究を通して日中関係史を見直すにはさらに課題がある。一つは、「蔣介石日記」には後世を意識して書かれたところがあるため、それと蔣の大量の演説と文書をいかに総合的に利用するべきか、という点である。また、研究者の政治的バイアスがどのように蔣介石と日中関係との研究に影響しているかを解明する必要もある。今後、新史料を利用した客観的、実証的な研究を期待し続けたい。

1 重光葵『昭和の動乱』中央公論社、1952年。

2 重光葵『重光葵外交回想録』毎日新聞社、1953年。